「7.13水害における新潟大学の支援活動」

学生・教職員が参加

7月13日（火）三条市、中之島町などに集中豪雨による災害が発生した。

新潟大学では、災害復旧に多数の救援活動が必要とされていることから、まず各学生サークルのリーダーにボランティアを呼びかけるため、7月15日（木）の学友会委員会で、災害救援ボランティアへの積極的な参加についてお願いしたところ、7月16日から21日にかけて50人を超える学生が参加した。

7月20日（火）には「災害救援ボランティアの募集について」が新潟県災害救援ボランティア本部から依頼があり、大学として積極的に災害救援ボランティアを支援することを受けて、7月22日（木）に「災害救援ボランティア募集中」の掲示を行って、学生の参加を呼びかけ、7月22日（木）、23日（金）、26日（月）～30日（金）の7日間で延べ283人の学生・教職員が参加した。なお、現地までの交通手段として大学のバス等を用意し、同ボランティア本部からの指示により、三条市において災害救援ボランティア活動に参加した。

ボランティアに参加する学生・教職員の活動内容は、現地のボランティアセンターで各自が作業を見つけることから始まり、作業現場では、家庭内の清掃、家具の搬出、ゴミ搬出、泥出し・泥上げなどに従事したが、災害後の連日の猛暑のため、参加者全員は悪臭、粉塵に余儀なくされ、真っ黒に日焼けし、疲労の色が隠せない者もいたが、参加者の顔はボランティア活動をやり遂げた充実感に満ち溢れ、また是非参加したいと感想を語り合っていた。ただ、被害の状況は、予想を遙かに上回るほどひどく、ボランティア活動の重要性を一人一人が痛感した。

また、7月22日に参加した者の内、工学部教員2人とともに学生32人、自然科学研究科学生4人は、授業のため栃尾市に行く予定であったが急遽、ボランティア活動に切り替えて参加した。

その他、現地でのボランティア活動以外にも、学内サークルが大学構内で募金活動を行ったり、市民団体が街頭で行っている募金活動に学生個人として参加するなど、今回の災害を契機に、一人一人が自分のできることを見つけ、ボランティア活動に参加する姿を随所で見ることができた。

また、現地でのボランティア活動以外にも、医学部医学科や医歯学総合病院では、災害医療救護活動のため医師・看護師を派遣した。

以上により、救援活動に参加した学生・教職員は、休日を中心とした個人での参加等を加えると700人を超える数が確認された。

さらに、本学では、学長、理事、部局長等が呼びかけ人となり、教職員に対して、今回の豪雨水害により被災された方々に対するお見舞いとして「義援金」の募集を7月28日（水）から8月31日（火）まで行い、新潟県へ贈呈した。

三条市立条南小学校に到着。作業の指示を受けた後、プールの清掃作業を行った。

第53回関東甲信越大学体育大会

今大会は、都留文科大学が新たに加わって13大学約5,700人の学生・教職員が参加し、主管校の長岡技術科学大学、信州大学及び本学の3大学を当番校として8月11日から9月5日までの日程で実施されました。

本学からは、約300人の選手が空手を除く16種目（ただし、バドミントン女子は、不参加。）に参加しました。種目別成績は、次表のとおり。

なお、本学が担当した7種目については、顧問教員を始め、関係部員・マネージャーが中心となって大会運営を行うとともに、養護教諭特別別科の学生が、救護員として各会場に待機するなど、多くの皆さんから多大なご協力をいただきました。

大会当日は、試合中のけが人の対応や、硬式野球の日程が雨天順延になるなど、様々なハプニングもありましたが、無事大会を行うことができました。

当番大学	競技種目			成績 優勝	成績 準優勝	成績 第3位	備考
長岡技術科学大学・主管	A	テニス	男	宇都宮大学	新潟大学	茨城大学 横浜市立大学	
			女	茨城大学	横浜市立大学	新潟大学 群馬大学	
		水泳	男	新潟大学	埼玉大学	茨城大学	
			女	筑波大学	横浜市立大学	群馬大学	
		弓道	男	千葉大学	埼玉大学	信州大学	2年連続優勝
			女	千葉大学	横浜市立大学	筑波大学	2年連続優勝
信州大学	B	準硬式野球		筑波大学	千葉大学	埼玉大学 群馬大学	
		ラグビー	A	横浜国立大学	山梨大学	都留文科大学	
			B	新潟大学	横浜市立大学	千葉大学	6年連続優勝
			C	筑波大学	信州大学	群馬大学	9年連続優勝
		体操	男	筑波大学	埼玉大学	新潟大学	19年連続優勝
			女	山梨大学	新潟大学	千葉大学	4年連続優勝
		柔道		筑波大学	埼玉大学	茨城大学 新潟大学	
		バレーボール	男	筑波大学	山梨大学	宇都宮大学	2年連続優勝
			女	宇都宮大学	新潟大学	山梨大学	
		バドミントン	男	千葉大学	埼玉大学	筑波大学	
			女	筑波大学	千葉大学	宇都宮大学	
		空手	防具組手	埼玉大学	千葉大学	山梨大学	2年連続優勝
			自由組手	信州大学	山梨大学	群馬大学	4年連続優勝
新潟大学	C	陸上競技	男	筑波大学	群馬大学	新潟大学	26年連続優勝
			女	筑波大学	都留文科大学	横浜国立大学	19年連続優勝
		ソフトテニス	男	群馬大学	埼玉大学	都留文科大学	
			女	群馬大学	宇都宮大学	新潟大学	
		バスケットボール	男	信州大学	横浜国立大学	筑波大学	3年連続優勝
			女	信州大学	埼玉大学	新潟大学	
		剣道	男	茨城大学	埼玉大学	新潟大学	7年連続優勝
			女	茨城大学	新潟大学	埼玉大学	
		卓球	男	新潟大学	信州大学	宇都宮大学 群馬大学	5年連続優勝
			女	新潟大学	茨城大学	群馬大学	8年連続優勝
		硬式野球		筑波大学	横浜市立大学	茨城大学 新潟大学	3年連続優勝
		サッカー		筑波大学	宇都宮大学	群馬大学 埼玉大学	8年連続優勝

新設研究科

大学院保健学研究科保健学専攻修士課程

看護学、放射線技術科学、検査技術科学の分野において
高度な知識と技術を有する専門家の育成を目指して

大学院保健学研究科保健学専攻修士課程は、看護学、放射線技術科学、検査技術科学の各分野において、（1）高度の専門知識と技術を有する人材の育成、（2）管理実践能力を有し指導的立場で活躍できる人材の育成、（3）国際協力に積極的に取り組む人材の育成、（4）保健学の将来を担う教育・研究者の育成、を教育目標として、2004年4月に設置されました。

保健学専攻は、看護学、放射線技術科学、検査技術科学の3分野からなり、定員はそれぞれ10名、5名、5名で計20名です。看護学分野は基礎・広域看護学と応用・臨床看護学の2領域、放射線技術科学分野は応用放射線科学と放射線診療技術科学の2領域、また、検査技術科学分野は基礎生体情報検査科学と臨床生体情報検査科学の2領域から構成されています。

このように、1専攻3分野とすることにより、3分野が1つの単位となって、共通科目を分担する一方、研究指導面においても相互に協力し、教育の幅と深さを増す上で効果的な組織と考えています。特に、放射線技術科学と検査技術科学においては、医学・理学・工学の技術を応用する医療技術科という点で、共通の性格を併せ持っており、両者を1つの学問体系として位置づけることにより、新たな教育・研究分野を開拓することも可能と考えられます。3分野での密接な連携と協力は、臨床の場でのチーム医療を構築する上での礎になるものと期待されます。また、保健学研究科は医歯学総合研究科ならびに医歯学総合病院と相互協力することにより、教育・研究面において更なる成果を上げることができると考えられます。

現在、保健学研究科保健学専攻には看護学分野20名、放射線技術科学分野10名、検査技術科学分野5名の1年次学生が学んでおり、各自研究テーマを絞って熱心に特別研究に取り組んでいます。高度な知識と技術を有する専門家として国内外で社会に貢献することを考えている学生、教育者・研究者になるべく精力的に研究に打ち込んでいる学生などが集い、保健学研究科は活気に満ちています。このような学生たちの中で保健学の領域にさらなる興味を持つ人が各自の研究を発展的に継続してゆくためにも、現在、医学部保健学科、保健学研究科保健学専攻においては、2006年4月に大学院保健学研究科保健学専攻博士課程を設置すべく、教職員一丸となって取り組んでおります。

（高橋益廣）

新潟大学歯学部　口腔生命福祉学科

「口腔（こうくう）」・「食べること」の視点から
要介護者・障害者のＱＯＬを追求できる人材の育成を目指して

新潟大学歯学部口腔生命福祉学科はむし歯や歯周病などの病気を予防し、口腔（こうくう）の健康を守る専門家である「歯科衛生士」を養成する学校としては全国初の4年制大学課程として2004年4月に開設されました（入学定員20名）。また、口腔生命福祉学科では「歯科衛生士」とあわせて、障害者や要介護の方などに対して、福祉全般に関する相談や助言・指導などの援助を行うことを専門とする「社会福祉士」という、歯科医療および福祉に関する二つの国家資格の受験資格が得られるという世界的にも例のないユニークなカリキュラムを構築しています。

現在、我が国では超高齢社会を迎え、これに伴い介護を必要とされる方が今後急速に増加していくことが予想されています。一方で、年金・医療・介護などの社会保障費用は急速に増大しており、このままでは社会保障制度自体が破綻してしまう恐れが生じているため、要介護者の機能回復（リハビリテーション）を支援し、要介護度の重度化を防止するとともに、要介護状態となることそのものを予防する介護予防が緊急の課題となっています。

要介護高齢者の方では、お口の清潔の不良から誤嚥性肺炎（口の中の細菌を含んだ唾液や食べかすが誤って気管に入ることによって起こる肺炎）を起こし、要介護度の重度化や死亡に繋がるケースが多いことが明らかになり、介護予防の重要な柱としてお口のケアが取り上げられるようになっています。

また、介護の3大基本要素は「食事」、「排泄」、「入浴」ですが、「食事」介護は栄養摂取や食べる楽しみといった要介護者の生命維持や生きがいの確保に最も重要な役割を果たしているにもかかわらず、全身や口の中の状態、食べ物の性状、介助の仕方などが複雑にからみあって一人ひとりの対応が異なり、誤嚥（ごえん：誤って気管に食べ物などが入ってしまうこと）や窒息の危険がつきまとうなど、高度な知識・技術と医師、歯科医師、栄養士、調理師、介護士など様々な保健・医療・福祉関係者の連携が必要な分野であるために、十分な対応がなされているとは言えませんでした。

このため、口腔生命福祉学科では「口腔ケアや食べること（摂食嚥下）に対する高度な専門知識を有しつつ、要介護者・障害者やその家族の立場になって保健・医療・福祉を総合的に考え、マネジメントできる専門家を養成する」ことにより、要介護者・障害者などが真に必要とする適切な保健・医療・福祉サービスを総合的に受けられるようにし、これらの方の健康と生活の質（Quality Of Life）を確保することを目指しています。

（大内章嗣）